

種文学賞十月

「スポーツ(運動)に関するエッセー」

小学二〜三年生の部 最優秀作品 (作者 小学二年生 女子)

「うれしかった、ぎやくてんがち」

わたしは前フルーツフラワーパークで、バターゴルフをしました。

おかあさんとしょうぶをしてさいしょはずっとまけてしまいました。そのときはまだ「かてるか

も。」と思っていました。でもだいニホール目わたしはまたまけてしまいました。そのときはもう、「つ

ぎのホールもやっぱりまけちゃうかも。」と思いました。

今回のバターゴルフは、九ホールありました。わたしは四ホールまでまけて、その後はどうてん、まけ、まけ、のくりかえしでした。でもわたしは「どうにかしてでもかつー！」と思っていたら五ホールくらいにコースの中にじやりが出てきました。そうしたらおかあさんのボールがじやりに入ってしまったし、これはわたしのかつさい大のチャンスです。でもわたしはあとちょっとでボールがカップに入るところで入らないので、いつのまにかおかあさんがじやりからぬけ出してカップに入れてしまいました。そこでさっきのさい大のチャンスがおかあさんのカップインでもみけされてしまいました。

そうして六ホール、七ホール、八ホールとすすんでついにつぎがさいしゅうホールです。おかあさんはつよきでわたしはよきでさいしゅうホールをむかえました。そこにはコースの中にじやりがありました。おかあさんはじやりによくはまります。だからまたわたしにさいだいのチャンスがおとずれました。

ついにさいしゅうホールのたたかいはじまりました。一だめはやはりおかあさんはコースの中のじやりにはまけてしまいました。でも、わたしはじやりにはまらずそのままカップに近づけました。二だめもおかあさんはぬけられないまま、わたしはもつとカップに近づけばかりです。三だめ、またおかあさ

んはじやりからぬけられませんが、わたしはちょっとだけカップからはなれてしまいました。そのあとともそのあともおかあさんはじやりからぬけられず六だめくらいになったときわたしはカップにボールを入れることができました。おかあさんは、やっと十二だめにじやりからぬけることができました。それからやっとおかあさんは十四だめにカップにボールを入れることができました。

あとは点数が一点でも少なかったらわたしのかちです。そして点数をメモしていた紙をわたしが計算しました。すると、四十三たい四十四でわたしのかちでした。さいしよおかあさんはしんじられなかつたらしくなんどもなんどもそのメモをしていた紙の点数を計算していました。

わたしはさいしよまけていたのでちやくてんがちしてうれしくてうれしくてたまりませんでした。だからわたしはおかあさんになんどもなんども「はじめておかあさんにかつた。はじめておかあさんにかつた。」と自まんしました。そのたびにおかあさんはくやしそうにしていますが、さい後は「すこいね。」とほめてくれました。

わたしはしあいはかてておかあさんにもほめられたからすこくすこくうれしかったです。

小学四く六年生の部 最優秀作品 (作者 小学五年生 男子)

「サッカーを知った日」

あの日からだつた。ぼくが本当のサッカーをするようになったのは。

記憶はあいまいだがたしか三年生の秋ぐらいの大会のある日のことだつた。その日試合は二回あつたが、ぼくは両方とも守備だろつと思つていた。

「集合」

いつものようにコーチから合図がかつた。そして、今回のレギュラーが言われる。

「トップ、へ 作者名」

え、いったんぼくは耳をうたがった。トップというのはメッシなどの大物がやるポジションなのである。自分がいっただれなのかわからなくなつた。しかし、自分が（作者名）であると思ひだし、体の底から喜びがあふれだしてきた。

いままでチームの下にいたぼくは、その時自分がチームのリーダーてき的てきのそんざいになつたと思ひ議ぎなほどに自信に満ちていたが、その自信はすぐにつぶされた。一回目の試合でなんと一点もいれることができずに負けてしまったのである。ぼくは、とてもくやしかった。そんなぼくにコーチがこういつてくれた。

「とにかく、がむしゃらにいけ。相手にずっとあたりつつける」

二回目の試合、ぼくはいわれた通りに、試合が終わるまで、相手がどうしようもあたりにいった。試合が終わったときはもうへとへとだった。それでもなぜか体がぼくに「もっとサッカーしたい」といつてるようだった。その試合は初シュート、初得点だった。

ぼくは今まででいちばんこの試合がいい試合だったと思う。それから、ぼくは今もトップのポジションをまかされている。本当にこの日は忘れられない日であった。

※ 文中に記載の作者名は伏せています。

中高生の部 最優秀作品（作者） 中学一年生 男子

「インドア派はアウトドア派になれるのか」

一年で最も嫌いな日は運動会が行われる日だ。多分他の人は違ふと思う。だが私はとにかく運動が嫌だった。休み時間は校舎内から運動場を見てなせみんなは外で遊ぶのだろうと疑問に思つてた。

多分私が運動というものが嫌いになつたのは五年くらい前だろう。友達にドッジボールをしようとい誘われたのだ。それまでは運動が嫌いというわけではなかったのだがエアコンがきいている教室がこ

よく、ポケーとしているのが好きだったのだ。そのせいもあったのだろう。弱かった。ドッジボールがとても強い子がいたのだがそいつにボールを豪速球であてられたのだ。腹部にあてられたのだが、呼吸が苦しくなるほど痛かった。それから私は誰がこんな痛い思いして外で遊ぶか！と思いまた「こちよいエアコンの効いた教室に戻るのだった。」

私はまた三年くらい「休み時間インドア生活」を続けていた。別にたいして問題はなかったが、運動会の日には毎回複雑な気持ちになった。徒競走は六人中毎回五位だった。六位ではなくてよかった、と思っていたのだがなんだか納得できなかった。だからちよつと運動するかと思いき家の前を走ったのだが近所迷惑だった。そこで私は五年生のとき足の速い人たちを入れた鬼ごっこチームのようなものを作ったのだ。私は毎日そこで走って五十メートル走のタイムを縮めようとしてみた。するとどうしたことだろうか。なんとタイムが二年前と比べて一秒半縮んでいたのである。ちよつとその頃から運動会での陸上競技は徒競走からリレーに変更されたのだが私は「おっ、あいつ結構遅いから余裕で勝てるな。」と思わせておきながら実は速かったという皮肉な作戦に利用させられることになった。これが本番で成功し会場は大さわぎになった。こんなことはこれまでの人生でなかったので非常に興奮していた。よし陸上競技は味方につけたなと思ったのだが、この考えは思わぬ形でふみにじられるようになるのだ。た。

五年生だから鬼ごっこチームは子供っぽいなど思ってそろそろ解散するかなと思ったのだが意外と長続きし、活動当初は一ケタだったメンバーが数ヶ月後には一ケタ増えていたことには誰もが驚いた。しかし、六年になりクラスが離れチームは解散した。だが五十メートル走のタイムはまた二分の一秒縮んでいた。ところが今度はみんなもタイムが上がっていたのである。しかも私よりも大幅に。ここで私は第二次発育成長期の存在に気付かされる。よくよく考えてみると私は五年生のとき急激に背が伸びていた。成長期はそのころから始まっていたのである。足が速くなったのは鬼ごっこをしていたからではなく単に体が成長したからである。つまり、私は鬼ごっこをしたからではなく、たまたま成長期が早く、足の速さが上がったのだ。早くはじまった分早く終わる。この事実に関心きました「休み時間インドア生活」が始まった。